

一般社団法人 日本身体障害者補助犬学会 第16回学術大会

The 16th Annual Meeting of the Japanese Society of Service Dog Research



次世代の補助犬について考える
～人と犬との相互作用の構築に向けて～

プログラム・要旨集

会 期： 2025年1月 11日(土) 10:00-16:30
12日(日) 9:00-16:00

開催方式： 現地開催のみ

主 催： 一般社団法人 日本身体障害者補助犬学会
後 援： 厚生労働省、国土交通省、大阪府、大東市、四條畷市、身体障害者補助犬を推進する議員の会、
公益社団法人 大阪府理学療法士会、一般社団法人 大阪府作業療法士会、
一般社団法人 大阪府言語聴覚士会、一般社団法人 日本リハビリテーション工学協会、
公益社団法人 大阪府獣医師会、一般財団法人 大阪府視覚障害者福祉協会、
社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会、一般社団法人 大阪脊髄損傷者協会、
公益社団法人 大阪聴力障害者協会（予定）、特定非営利活動法人 日本補助犬情報センター
協 賛： アッツィ合同会社、有限会社ムース、川村義肢株式会社、株式会社ダスキン、一般社団法人 和わわ、
特定非営利活動法人 日本補助犬情報センター、大阪保健医療大学、学校法人 四條畷学園、
社会福祉法人 淳涌界 特別養護老人ホームおふくろの家、日本全薬工業株式会社 ZENOAQ、
アニマルリテラシー総研、株式会社スイッチオンサービス、有限会社ナインアンドフォー、
身体障害者補助犬を推進する議員の会、公益社団法人 大分県獣医師会、
アニコム先進医療研究所株式会社

協 力： 学校法人 四條畷学園

プログラム委員

大会長	野口 裕美	一般社団法人 日本身体障害者補助犬学会 理事 四條畷学園大学 リハビリテーション学部作業療法学専攻 教授
委員	荒川 由美子	アツヴィ合同会社
	川村 慶	川村義肢株式会社 代表取締役
	北口 志穂	医療法人 聖志会渡辺病院
	剣持 悟	川村義肢株式会社 義肢装具製造事業部生産管理課 係長
	花田 恵介	四條畷学園大学 リハビリテーション学部作業療法学専攻 教授
	向井 公一	四條畷学園大学 リハビリテーション学部理学療法学専攻 准教授
	武藤 裕司	四條畷学園大学・四條畷学園短期大学 入試広報課 課長
	守屋 隆	NPO 法人 クレヨンリンク 理事長
	吉田 文	一般社団法人 日本身体障害者補助犬学会 理事 大阪保健医療大学 保健医療学部リハビリテーション学科 教授

(五十音順)

事務局・お問い合わせ

日本身体障害者補助犬学会 第16回学術大会運営事務局

(株式会社アステム内)

〒530-0044 大阪府大阪市北区東天満 2-7-12 スターポート

TEL 06-6242-6681 FAX 06-6242-6631

電子メール：convention-help@astem-co.co.jp



大会 HP:QR コード

大会長挨拶



次世代の補助犬について考える ～人と犬との相互作用の構築に向けて～

野口 裕美

日本身体障害者補助犬学会 第16回学術大会 大会長

四條畷学園大学 リハビリテーション学部作業療法学専攻 教授
一般社団法人 日本身体障害者補助犬学会 理事

今回の学術大会では、「次世代の補助犬について考える～真に当事者・社会が求める補助犬とは・人と犬の相互作用の構築に向けて～」というテーマを掲げました。このテーマの設定にあたっては、補助犬がどのように当事者や社会に必要とされ、その効果を十分に発揮できるかについて、今一度考え直すべき時期に来ていると強く感じたからです。

世界に目を向けると、補助犬の育成事業は日本と比較してより柔軟かつ広範な解釈のもと発展を遂げています。日本においても、補助犬が法的な枠組みの中でどの方向を目指し、どのように進化していくべきかが問われています。補助犬の効果を真に必要とされる方々にどのように届けるべきか、またそのために人と犬の関係性をどう構築していくかを、皆様と共に考えていく場として本大会を位置付けました。

補助犬は、当事者の生活を支えるだけでなく、社会全体で共生するための重要な存在です。人と犬の間に生まれる相互作用が、当事者の自立や社会的な参加を促進し、私たちの社会をより豊かにしてくれると確信しています。

この学術大会が、次世代の補助犬の在り方やその発展に向けた実りある議論の場となることを願っております。そして、補助犬が今後ますます多くの人々に必要とされ、社会全体でその価値が認識される未来を共に築いていきましょう。

また、今回の開催は、「ほじょ犬のひろば」との初のコラボレーションによるものとなり、多くの一般市民の方にも、補助犬の役割や意義をより深く知っていただける啓発の機会でもあります。様々な楽しい企画を通じて、補助犬の存在を身近に感じていただければ幸いです。

最後に、本大会の開催にあたり、会員をはじめ、一人でも多くの参加とご協力のもと実りある学術大会に作り上げて参りたいと思います。皆様ご参加を大阪の地にて心よりお待ちしております。

会場案内

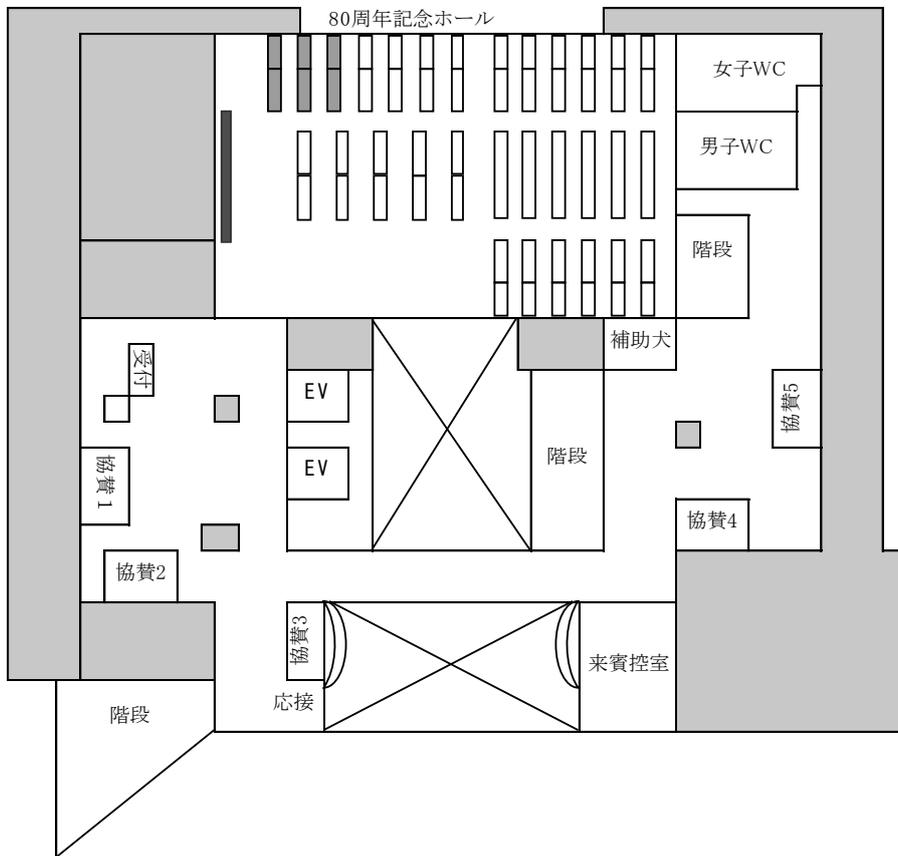
四條畷学園短期大学清風学舎 80周年記念ホール(6階)

所在地 〒574-0001 大阪府大東市学園町6番45号



四條畷学園短期大学ホームページより

80周年記念ホール(6階)



第16回日本身体障害者補助犬学会 字幕案内

参加者のみなさんへ

2025年1月11日開催

日本身体障害者補助犬学会 市民公開講座

字幕案内

Subtitle guidance

QRコードを読み取ると、
ウェブで字幕を見ることができます
Scan the QR code to see subtitles.



画面右上の「翻訳」をオンにすると、
自分の見たい言語で見ることができます

By turning on the translation function on the
upper right of the screen, you can see it in the
language you want to see.



参加者のみなさんへ

2025年1月11日開催

ほじょ犬のひろば@もりねき

Service dog park @ Morineki

字幕案内

Subtitle guidance

QRコードを読み取ると、
ウェブで字幕を見ることができます
Scan the QR code to see subtitles.



画面右上の「翻訳」をオンにすると、
自分の見たい言語で見ることができます

By turning on the translation function on the
upper right of the screen, you can see it in the
language you want to see.



2025年1月12日開催

日本身体障害者補助犬学会 第16回学術大会

字幕案内

以下のQRコードを読み取るかリンクをクリックすると、ブラウザまたはUDトークのアプリで字幕をご覧いただけます。アプリ用のQRコードとリンクはUDトークのアプリ(無料)をお持ちの方のみ、ご利用いただけます。



ブラウザ字幕用



UDトークアプリ用

アプリはどなたでも無料でダウンロードできます。



日本身体障害者補助犬学会 第16回学術大会 プログラム・目次

※プログラムは変更の可能性があります。あらかじめご了承ください。

市民公開講座 1/11 (土)

13:00 ~ 16:30

四條畷学園短期大学清風学舎 (6階) 80周年記念ホール

受付開始

12:40 ~

来賓挨拶 逢坂 伸子 (大東市長)
挨拶 小谷 明 (四條畷学園理事長)

●シンポジウム：人と犬が幸せに暮らすために

コーディネーター：山崎 恵子 (一般社団法人日本身体障害者補助犬学会 理事、
一般社団法人アニマル・リテラシー総研 代表理事)

1) 犬の食について考える～薬膳ごはんのススメ～

油木 真砂子 (愛玩動物看護師、中国中医薬研究促進会認定 国際中医薬膳師、
テリントン Tタッチ 認定プラクティショナー、
優良家庭犬普及協会グッドシチズンテスト サブジャッジ)

2) 犬のしつけと行動学～ストレスレスな関係づくり～

入交 眞巳 (東京農工大学 ディープテック産業開発機構 伴侶動物診療拠点 特任准教授)

3) 犬のしつけと遊び～おもちゃの役割から選び方まで～

金子 真弓 (優良家庭犬普及協会 常任理事&公認ジャッジ、CPDT 認定トレーナー、
コング専属トレーナー、テリントン Tタッチ 認定プラクティショナー)

●懇親会

17:30 ~

会場：Keitto Ruokala (ケイトトルオカラ)
大阪府大東市北条3-1-1 (もりねき広場内)
・前代表理事 退任挨拶

同時開催：ほじょ犬のひろば@もりねき

10:00 ~ 16:00

もりねき広場

補助犬デモンストレーション

11:00 ~、13:00 ~、15:00 ~

実施団体：公益財団法人 関西盲導犬協会、特定非営利活動法人 兵庫介助犬協会、社会福祉法人 日本介助犬協会、
社会福祉法人 日本ライトハウス盲導犬訓練所、社会福祉法人 日本聴導犬協会
補助犬紹介ブース 10:00 ~ 16:00

受付開始

8:30 ~

●開会式

大会長挨拶 野口 裕美 (四條畷学園大学)

9:00 ~ 9:05

挨拶 木村 友厚 (四條畷学園大学学長)

9:05 ~ 9:10

●大会長講演

9:10 ~ 9:35

「次世代の補助犬について考える」 ~PT/OTとしての歩み~

野口 裕美 (四條畷学園大学)

●一般演題発表①【社会・啓発・リハビリテーション】

9:40 ~ 10:40

座長：菊地 尚久 (千葉県千葉リハビリテーションセンター)

1) 医療機関における補助犬受け入れ状況：15年間の推移

三浦 靖史 (神戸大学大学院 保健学研究科)

2) 地域住民における身体障害者補助犬と補助犬法の認知度

吉田 桃菜 (神戸国際大学 理学療法研究室)

3) 盲導犬使用者の交通行動の特徴について

元田 良孝 (岩手県立大学)

4) 介助犬お散歩ボランティア活動の意義と今後の継続のあり方について

松川 蒼真 (四條畷学園大学 リハビリテーション学部作業療法学専攻)

5) 業種別従業員対象『盲導犬及び視覚障害に関する意識調査』

池田 義教 (公益財団法人 日本盲導犬協会)

6) 飲食店事業者側とユーザー双方に対する補助犬同伴受け入れ実態調査

石田 夢果 (社会福祉法人 日本介助犬協会)

休憩

10:40 ~ 10:45

一般演題発表②【獣医学関連・訓練関連・その他】

10:45 ~ 11:45

座長：佐野 智浩 (公益財団法人 日本盲導犬協会)

7) 1996年から続く保護犬からの聴導犬候補犬選びに関する考察

有馬 もと (社会福祉法人 日本聴導犬協会)

8) 盲導犬の口腔環境の調査と口腔ケアの公衆衛生上の意義

中山 光子 (日本大学 松戸歯学部 病理学講座)

9) 現場報告：日本介助犬協会のパピー育成プログラム（ボランティア指導）について

山口 歩 (社会福祉法人 日本介助犬協会)

10) 小学3年生を対象としたほじょ犬体験教室の実施について

剣持 悟 (川村義肢株式会社)

11) 今だからこそ言える事 ～元介助犬使用者の立場から～

平野 友明 (ほじょ犬ファミリーすまいるぐ)

12) 今だからこそ言える事 ～元介助犬使用者家族の立場から～

平野 克美 (ほじょ犬ファミリーすまいるぐ)

昼休憩

11:50 ~ 12:40

●新代表理事 就任挨拶

12:40 ~

●第15回 学術大会 一般演題発表 最優秀賞 表彰式

12:50 ~

●教育講演

13:00 ~ 14:15

座長：高柳 友子 (日本介助犬協会)

「ペットと一緒に災害を乗り越える!!～災害時あなたは自分のペットを守れますか?～」

演者：大下 勲 (大阪 VMAT 副隊長、大下動物病院 院長)

●国際シンポジウム

14:30 ~ 15:45

座長：福井 良太 (日本介助犬協会 国際担当アドバイザー)

「Sensory inputs for clients with disabilities and assistance dog work」

Mihaela Grubisic

(Professor Lecturer at University of Applied Health Sciences ,Occupational Therapist (Bsc.OT), Master of Physiotherapy (M.Sc.Physioth.) Senior instructor in Sensory Integration and Animal Assistance Intervention expert)

Blanka Gilja, Jennifer Ceria

(Sensory Integration expert and Animal Assistance Intervention expert at Centre for Rehabilitation Silver, Zagreb)

吉田 文 (大阪保健医療大学)

●閉会 / 次回大会長挨拶

15:45 ~ 16:00

大会長講演・市民公開講座・教育講演・シンポジウム

次世代の補助犬について考える ～PT/OTとしての歩み～



野口 裕美

日本身体障害者補助犬学会 第16回学術大会 大会長

四條畷学園大学 リハビリテーション学部作業療法学専攻 教授
一般社団法人日本身体障害者補助犬学会 理事

「次世代の補助犬について考える～真に当事者・社会が求める補助犬とは・人と犬との相互作用の構築に向けて～」というテーマのもと、私は理学療法士・作業療法士として20年間にわたる経験を踏まえ、補助犬との関係性がどのように障害者の生活を支え、社会とのつながりを深めてきたか、また、一方で私自身が人と動物の分野の研究を進めるにあたり、どのような分野に広がりを持たせてきたのかを皆様にお伝えしたいと考えています。

補助犬は障害を持つ方々にとって身体的・精神的支援を提供するだけでなく、社会全体の意識を変える力を持っています。一方で日本では法的枠組みや制度により、その柔軟性や実効性が国際的な基準と比べて制約されている面が少なくありません。当事者の真のニーズに応えるためには、技術の進化や制度の整備だけでは不十分であり、人と補助犬の間に築かれる深い相互作用が必要不可欠です。この関係性は、当事者のQOL（生活の質）向上だけでなく、真の共生社会の構築にも大きく貢献すると考えております。

私自身、理学療法士・作業療法士として補助犬を希望する、使用する当事者の方々とかかわる中で、補助犬が使用者に与える希望や安心感、また自立と社会参加の促進を促す心理的効果を沢山、目の当たりにしてきました。この経験を通じて、補助犬が使用者にとっては、かけがえのない「パートナー」であるという認識が更に深まりました。本講演では、これらの実体験を基に、補助犬が果たす役割の意義を具体的に示していきます。

また、次世代のセラピストに向けて、補助犬事業に関して知識や技術、研究の継承の重要性を常々考えています。特に若手セラピストには、現場での実践を通じて補助犬の活用方法やその可能性を広げてほしいと願っています。これからの補助犬事業の発展には、セラピストが補助犬の特性や可能性を理解し、障害当事者に一番近い存在として情報を提供していくことが重要です。

最後に、補助犬をめぐる日本の現状と課題を共有し、より多様で柔軟な関与の在り方を模索する必要性について参加者の皆様と議論を深めていきたいと考えています。この学術大会が、補助犬の未来を形作る貴重な一歩となることを願い、私自身の知見を皆様と共有させていただきます。補助犬と共に歩む社会、その可能性を広げるために、共に考え、共に未来を築きましょう。

市民公開講座

人と犬が幸せに暮らすために

コーディネーター：山崎 恵子

(一般社団法人 日本身体障害者補助犬学会 理事、一般社団法人 アニマル・リテラシー総研 代表理事)

1) 犬の食について考える～薬膳ごはんのススメ～

油木 真砂子 (愛玩動物看護師、中国中医薬研究促進会認定 国際中医薬膳師、テリントン Tタッチ 認定プラクティショナー、優良家庭犬普及協会グッドシチズンテスト サブジャッジ)

薬膳は特別な食材が必要な特別なご飯ではありません。

食物は食べて体の中に入ってから発揮する性質と働きを持っています。

中医学的な動物の体のしくみと、食物が持つ性質と働きを照らし合わせて適切な食材を選び作るご飯が薬膳です。

今回は動物の「老い」に焦点を当て、老いた体に起こる特徴的な変化とそれに対して特に今の時期薬膳で選ぶべき食材、市販のフードを使用しながら薬膳を取り入れる方法をご紹介します。

2) 犬のしつけと行動学～ストレスレスな関係づくり～

入交 眞巳 (東京農工大学 ディープテック産業開発機構 伴侶動物診療拠点 特任准教授)

- ・犬と人の関係は今どのように考えられているのか？
- ・犬と人のコミュニケーションの取り方
- ・犬の気持ちの読み方
- ・「しつけ」とは？

3) 犬のしつけと遊び～おもちゃの役割から選び方まで～

金子 真弓 (優良家庭犬普及協会 常任理事&公認ジャッジ、CPDT 認定トレーナー、コング専属トレーナー、テリントン Tタッチ 認定プラクティショナー)

国内外の多くの海外トレーナーや専門家から直接指導を受け、常に最新の情報と技術を発信し続けている。パピークラスから問題行動矯正、競技レベルまで対応したしつけ教室「パップスフレンズ」を神奈川県にて主宰。また全国の専門学校や業界のプロを対象としたセミナーやワークショップも行っている。・ 優良家庭犬普及協会常任理事&公認ジャッジ ・ CPDT認定トレーナー ・ コング専属トレーナー ・ Tタッチ認定プラクティショナー

講演内容：50年前に偶然発見されたコングはその後偶然の発見と共にプロによって使い方を開拓されてきた。今や誰もが知っているシンプルなおもちゃの興味深い歴史とアメリカ本場の様子を紹介。また動物病院、トリミング、しつけ教室、トレーナー、ペットショップなど、プロの仕事現場で活用されているシンプル且つ効果的な使用方法を解説する。世界で最もプロが推奨するおもちゃとして有名なコングの奥深い謎と犬の行動修正の関係とは！？・犬と人の関係は今どのように考えられているのか？

教育講演

ペットと一緒に災害を乗り越える!! ～災害時あなたは自分のペットを守れますか?～

大下 勲

大阪 VMAT 副隊長、大下動物病院 院長

東日本大震災の教訓を踏まえ、2013年環境省が『災害時におけるペットの救護対策ガイドライン』を策定し、2018年には熊本地震を参考に改訂版として『人とペットの災害対策ガイドライン』が策定された。この中には災害時にはペットと一緒に同行避難することが推奨されているが、ペットの同行避難とペットとの同伴避難が混同されている場合がよくある。近年、毎年のように台風や豪雨による災害が発生し、それに伴い災害時のペット同行避難についても各方面で取り上げられ、議論されるようになってきたが、実際には同行避難しても避難所での受け入れを拒否される事例も多く見受けられる。

理由の一つは避難所の開設は行政主導であっても、実際の運営は各避難所の施設管理責任者（小学校の場合は校長先生、自治会館の場合は自治会長）と避難者に権限があるため、それらの人々に、ペットの同行避難に関する認識がないこと、また行政側は体力の衰えたあるいは認知症の高齢者、要介護者、障害者、妊婦、外国人などの、いわゆる災害弱者（ペットと同行避難した飼い主も災害弱者に含まれると考える）に対する対策・対応が十分できていないため、実際の災害現場では同行避難した飼い主とペットの対応にまで手が回らないのが現状である。

防災対策の三要素として『自助』・『共助』・『公助』があるが、実際の災害現場では人命優先の下、ペットに関する『公助』は期待できない。そのため飼い主は自分と自分のペットを守るため、平時から自分自身の防災力を高めるための準備とペットの適正飼育が重要となる（自助）。また避難所での生活やペットのみを在宅飼育する場合には、飼い主同士が協力してペットの世話をする必要があり、また自分の留守中に自宅が被災した場合、ペットの安否確認をお願いすることもあるため、普段から飼い主同士のコミュニケーションが大切となってくる（共助）。

災害対策の基本はまず自分の住んでいる地域で起こりうる災害の種類を市町村が作成している地域防災計画、避難所運営マニュアル、ハザードマップ等で知っておく。それを基に、いざ災害が発生した場合の避難経路を平時から確認し、自らの避難計画を作成しておくことが重要である。また、自分が避難する指定避難場所ではペットの受け入れ体制がどのようになっているかを、防災訓練に参加した時などに行政担当者や避難所運営責任者に確認しておく必要がある。また自分の家の耐震性や構造を調べ、災害が起こってもできるだけ在宅避難あるいはペットのみ在宅飼育といった色々な避難方法を想定し、そのための準備をすることが大切である。

平時に行うペットの適正飼育には、飼育頭数の制限、健康管理（避妊・去勢手術も含まれる）、各種予防、個体識別、社会化などのトレーニングに加え、散歩時のマナーなどが挙げられる。

国際シンポジウム

「Sensory inputs for clients with disabilities and assistance dog work」

Mihaela Grubisic

(Profesor Lecturer at University of Applied Health Sciences ,Occupational Therapist (Bsc.OT) Master of Physiotherapy (M.Sc.Physioth.) Senior instructor in sensory Integration and Animal Assistance Intervention expert)

Blanka Gilja, Jennifer Ceria

(Sensory Integration expert and Animal Assistance Intervention expert at Centre for Rehabilitation Silver, Zagreb)

吉田 文

(大阪保健医療大学)

Sensory input refers to the information our nervous system, brain, and body receive during interactions with the world, such as touching, moving, playing, watching, listening, tasting, or performing daily tasks. Sensory Integration is the central nervous system's ability to process information from various senses, enabling individuals to tolerate sensory experiences and integrate them. Sensory input involves responses to stimuli perceived by our eight senses: smell, sight, touch, taste, hearing, and internal systems (proprioceptive, vestibular, interoceptive). Integration happens automatically, helping us understand internal signals, self-calm, focus, learn, move, and engage meaningfully with the world. Recent research highlights the benefits of animal-assisted interventions, especially with dogs, in overcoming challenges. However, the effects of dogs on sensory systems and sensory challenges are less understood. This presentation explores how sensory inputs shape the lives of assistance dog users and their work across various tasks and roles.

一般演題（口述）

抄録

1

演題名	医療機関における補助犬受け入れ状況：15年間の推移
演者氏名	三浦 靖史 倉澤 悠維
所属	神戸大学大学院保健学研究科

背景：補助犬利用者が医療機関を安心して利用できるように、我々は、医療機関における補助犬の受け入れ状況に関する調査を、2008年から3年毎に実施している。今回、第6回調査を2023年に実施した。

方法：2023年11-12月に、兵庫県の214病院と福岡県の244病院の看護部長を対象に、過去5回と同様の補助犬に関するアンケートを郵送で依頼しウェブアンケートで回答を得た。

結果：回答率は17.2%で、2020年の16.1%から変化がなかった。補助犬同伴での来院経験がある施設は、兵庫県では2008年の18.5%、2011年の31.9%、2014年の34.4%、2017年の19.3%、2020年の34.0%と比較して、2023年では27.5%であり、2011年以降ほぼ同様であった。福岡県においても2023年は14.3%であり、2011年の調査開始以降同様であった。兵庫県での補助犬受け入れ可標識の掲示率は、2023年は23.5%であり、2017年とほぼ同様であった。啓発ポスターの掲示率は、2023年は9.8%で、2014年とほぼ同様であった。

考察：現在、新型コロナウイルス感染症は一応の収束を認めているが、医療機関における補助犬利用者の受け入れ状況は、コロナ禍を経てもコロナ以前と比して大きな変化はなかった。

結論：補助犬受け入れを促進するように、医療機関への継続的な働きかけが必要である。

2

演題名	地域住民における身体障害者補助犬と補助犬法の認知度
演者氏名	吉田 桃菜 ¹⁾ 三浦 靖史 ²⁾
所属	1) 神戸国際大学 理学療法研究室、2) 神戸大学大学院保健学研究科

背景：身体障害者補助犬は、障害者の社会参加と自立に重要な存在である。日本における補助犬の認知度は未だ高いとは言えず、不適切な対応も報告されている。そこで、地域住民の補助犬に関する認知度を調査した。

方法：2024年9月に、神戸市東灘区で実施された体力測定会に参加した地域住民を対象として、補助犬に関する選択回答方式のアンケート（6分野54項目）を実施した。

結果：263名（男95名、女167名、他1名）から回答を得た。年齢層は60才以上70才未満が41.8%、70才以上80才未満が23.2%、50才以上60才未満が19.0%であった。職業は専業主婦が23.4%、パート・アルバイトが21.5%、定年退職が15.5%であった。身体障害者補助犬法を知っているのは5.3%であった。補助犬を知っているのは91.6%、盲導犬は100%、介助犬は66.9%、聴導犬は37.3%であった。実際に見たことがあるのは、盲導犬が75.3%、聴導犬が1.5%、介助犬が6.1%であり、見かけた場所は、公共交通機関が39.7%、道路が37.5%であった。身体障害者補助犬法を知っていたのは5.3%であった。

考察：補助犬の認知度は高いが、補助犬法の認知度はかなり低いことから、法に沿わない不適切な対応が生じてしまうことが懸念される。そのため、補助犬法に関する啓発活動が必要と考えられた。

3

演題名	盲導犬使用者の交通行動の特徴について
演者氏名	元田 良孝 宇佐美 誠史
所属	岩手県立大学

盲導犬は白杖に比べ視覚障害者の誘導に関して優れた特性を持つとされているが、交通行動に関し定量的な比較はほとんど行われていない。本研究ではこの点を明らかにするため盲導犬使用者と非使用者の視覚障害者に交通行動に関する同一内容のアンケート調査を行い、より定量的に両者の交通行動を比較し盲導犬使用のメリットを把握することを目的とした。日視連や複数の盲導犬育成団体に依頼して主としてメールによりアンケート調査を行い、盲導犬使用者 62 通、非使用者 188 通の有効回答が集まった。この結果盲導犬使用者は外出頻度が非使用者より多く、道路の点字ブロックの無いところの通行、歩道上の駐輪回避、電柱や電柱ステーの回避、道路の横断、横断勾配のある道路の直進やホームで列車のドアを探すこと等で非使用者よりクレームが少なく誘導が優れていることが分かった。また盲導犬使用者自身の比較によれば白杖と比べ歩行速度の向上、障害物との接触回数の減少、外出の疲労度の軽減、外出機会の増加、頭の中の地図の簡略化等のメリットが明らかとなった。一方盲導犬使用者は夏の暑い日の歩行に難があり、タクシーの乗車拒否は非使用者より多く経験していることが明らかとなった。なお非使用者が盲導犬を使用しない主な理由は、白杖で十分、ガイドヘルパーで十分、飼育が面倒等であった。

4

演題名	介助犬お散歩ボランティア活動の意義と今後の継続のあり方について
演者氏名	松川 蒼真 野口 裕美
所属	四條畷学園大学リハビリテーション学部作業療法学専攻

介助犬お散歩ボランティアを対象に活動状況や満足度に関してアンケート調査を実施した。活動内容は主に介助犬使用者に代わって夕方の時間に 30 分程度、犬のお散歩に行くことである。参加者の年齢は 20 代から 70 代まで幅広い年齢層で性別は、男性が 2 人、女性が 5 人であった。活動の頻度は、1 か月に平均 1 回が 4 人、6 回が 2 人、7 回が 1 人であった。参加年数は 1 年未満が 2 人、1 年目が 1 人、3 年目が 1 人、4 年目が 1 人、7 年目が 2 人であり、長期にわたって活動している者もいた。参加動機は、社会貢献の意欲や家族からの影響が多く、参加当初の目的は「介助犬の役に立ちたい」が主な理由で、現在の目的も「社会貢献」が中心である。その後の参加目的の変化に関して 3 人が変化を認め、ボランティア活動を通じた経験やユーザーとの関わりがその理由とされる。介助犬の存在は 5 人が活動以前より知っていた。身体障害者補助犬法は参加前に知っていたのは 3 人であった。ボランティア活動に対する満足度は、満足しているが 4 人、満足していないが 3 人であり、満足していない理由は人数の少なさが負担に感じられることが分かった。ボランティアは介助犬使用者をサポートする役割意識と責任感を持って参加していることがわかった。ボランティアを継続する体制を維持するためには、犬とのふれあいを楽しみつつ参加者を増やすことや活動頻度の負担を軽減する取り組みが必要であると考えられた。

5

演題名	業種別従業員対象『盲導犬及び視覚障害に関する意識調査』
演者氏名	池田 義教
所 属	公益財団法人 日本盲導犬協会

2023年公益財団法人日本盲導犬協会が、盲導犬使用者（以下、ユーザー）237名を対象に実施したアンケートにおいて、この1年間での「盲導犬同伴での受け入れ拒否の有無」について聞いたところ、「受け入れ拒否にあった」と回答したユーザーが103名、延べ208件の拒否が発生していることがわかりました。具体的な発生場所としては、飲食店が最多で、次いで交通機関、宿泊施設と続き、多くのユーザーが活動の制限を受けている現状があります。こうした受け入れ拒否の原因を探るため、日本盲導犬協会では、2024年8月に、受け入れ義務のある事業者側で働く従業員975名を対象にした『盲導犬および視覚障害に関する意識調査』を実施しました。法律の認知度、受け入れへの意識、視覚障害に対する認識などを聞く中で、受け入れ拒否につながる要因も見えてきました。データを基に発表します。

本報告では、47項目に及ぶアンケート結果の中から、データを抜粋して報告します。

6

演題名	飲食店事業者側とユーザー双方に対する補助犬同伴受け入れに実態調査
演者氏名	石田 夢果 渡邊 真子 磯貝 歩美 後藤 優花 山本文加 高柳 友子
所 属	社会福祉法人 日本介助犬協会

はじめに：介助犬啓発を実施する中で、身体障害者補助犬法の認知度が低いと感じる。愛知県より生活衛生同業組合に講習をする機会を得たので講習後にアンケートを実施、介助犬使用者双方に対して調査し、今後の啓発内容を検討したい。

方 法：アンケート①2023年9月26日実施、愛知県主催の生活衛生同業組合連合会講習会参加者44件。アンケート②2023年8月16日～2023年9月8日実施、当会所属の介助犬ユーザー8件に対してウェブ上で回答を得た。

結 果：アンケート① 介助犬を知っている75%補助犬法を知っている61%、46%が「いつでも受け入れ可能」と回答したが、受け入れ経験のある店舗は0だった。

自由記述には補助犬の違いや役割を知った、障がい者への声掛け方法を学べたと記載があった。条件付きで受け入れ可能とした条件には、場所を指定する、介助犬のみ店の入口で待機してもらうと記載している事業者もあった。

アンケート② 同伴拒否の理由として衛生上の問題や他のお客様への影響、物理的な問題、決まりだからと言われたと記載があった。一方、同伴受け入れの例として時間や場所の指定を受けた、広い席を優先的に案内してくれた、責任者に説明すると入店できたが心地よくないと回答する使用者もいた。

考 察：補助犬法の存在を知っていても実務的な理解がなく具体的な受入れの例を紹介し啓発をしていく必要がある。また、合理的配慮についても啓発の必要性を感じた。

7

演題名	1996年から続く保護犬からの聴導犬候補犬選びに関する考察
演者氏名	有馬 もと
所属	社会福祉法人 日本聴導犬協会

日本聴導犬協会は「保護犬からの聴導犬育成」という「障がい支援」と「動物福祉」の2つの福祉を掲げて1996年に創設した。保護犬を補助犬育成に活用したプログラムは、米国ではDogforDeaf、Neads、サンフランシスコSPAや日本聴導犬協会のアソシアートである英国聴導犬協会などがあつた。しかし、補助犬候補として注目されてこなかった、アジア犬種（柴犬や秋田犬）などの日本犬ミックスを活用した補助犬育成プログラムでの調査は、世界でも類を見ない。有馬は、英国聴導犬協会やブルークロスなど、保護犬の気質アセスメント項目を参考に、オリジナルな査定グラフを作成し、創設からの28年間に渡る継続的な調査を行ってきた。

保護犬数の減少と介助犬育成に伴い、2002年からは年間に1～2頭の購入も始めているが、日本聴導犬協会は全国に『聴導犬候補犬ネットワーク』として協力体制を結ぶ保健所や動物愛護センター、動物保護団体など、23ヶ所の団体がある。

通常、候補犬選びでは

- ① 現場スタッフによる個々の犬に関するヒアリング
- ② ①で選ばれた候補犬を個室にて観察
- ③ 観察後にふるい分けし、アセスメントグラフでチェック
- ④ 現場スタッフと共に、戸外での、再アセスメント

これらの工程を経てI団体から1～2頭を譲渡いただてきた。年間では10頭前後の候補犬を選んきたが、その成功率は15～30%であつた。

8

演題名	盲導犬の口腔環境の調査と口腔ケアの公衆衛生上の意義
演者氏名	中山光子 ¹⁾ 鈴木友子 ²⁾ 馳川ゆきの ³⁾ 山川伊津子 ⁴⁾ 久山佳代 ¹⁾
所属	1) 日本大学 松戸歯学部 病理学講座 2) ヤマザキ動物看護大学 動物看護学部 動物看護学科 3) 日本補助犬情報センター 4) ヤマザキ動物看護専門職短期大学 動物トータルケア学科

目的：補助犬が清潔で健康な状態を保つことは、補助犬ユーザーの社会参加や公共施設の受け入れを促進するために不可欠である。特に口腔ケアにより口腔の健康を管理することは、歯周病予防や全身の健康維持だけでなく、人獣共通感染症のリスクも低減させる。本研究の目的は、盲導犬の口腔環境を調査し、伴侶犬との比較を通じて、補助犬における口腔ケアの有用性とその公衆衛生上の意義を明らかにすることである。

方法：2024年10月から11月末にかけて、研究協力に同意を得た盲導犬7頭を対象に、頬粘膜の細胞を採取して口腔擦過細胞診を実施した。採取した細胞は染色後、光学顕微鏡で観察し、口腔内細菌叢および歯周病関連微生物、人獣共通感染症の起因菌（例：クラミジア、糸状菌、真菌類）の有無を確認した。

結果：盲導犬の口腔環境では、伴侶犬と同程度の好中球及び細菌群が確認されたが、歯周病関連微生物や人獣共通感染症の起因菌は検出されなかつた。

考察：盲導犬の口腔内環境は良好であり、歯周病や人獣共通感染症のリスクが低いことが示された。この結果は、日々の口腔ケアが補助犬の公衆衛生上の安全性を高めることを裏付けている。今後、さらに調査を進め、補助犬への口腔ケアの重要性を社会に示していきたい。

9

演題名	現場報告 「日本介助犬協会のパピー育成プログラム（ボランティア指導）について」
演者氏名	山口 歩 田辺 冬華 水谷 悠美 橋本 友樹 水上 言 高柳 友子
所属	社会福祉法人 日本介助犬協会

【はじめに】日本介助犬協会では、介助犬と共に人と犬をつなぐ取り組みとして AAA や AAT、付添犬等の Dog Intervention、障害児等への特別なマッチング：With You プロジェクトにも力を入れている。どの分野で活躍するにも家庭での生活が必須となり、生活しやすく様々な環境でも安定して過ごせることが求められるため、当会ではパピー時期の育成プログラムに力を入れている。特に子犬を生後 2 ヶ月～約 1 歳まで一般家庭に預け、人と暮らすルールや様々な環境への社会化を担うパピーホーム（以下、PH）に対する指導にも力を入れているため、取り組みについて報告する。

【取り組み】個別指導：各犬の月齢や特徴に合わせた自宅訪問、必要な環境を設定したプログラムを計画
グループ指導：月齢の近い子犬の PH4～10 家族を 1 グループとし、しつけや社会化のレクチャー、当会の事業理解を深める取り組み、オンライン指導：報告書のオンライン化、動画による予習復習、個別・グループ指導にオンラインツールを活用

【成果と展望】PH の知識と技術があがることとトレーナーが各犬の特徴を早期に捉えることを目標として様々な方法を通して指導を行うことで、各犬に合わせた指導を PH に対して行うことが出来た。パピー育成プログラムを通して、より効果的に各犬に合わせたプログラムを計画することが、様々なニーズに合わせた活躍につながる可能性を感じている。

10

演題名	小学3年生を対象としたほじょ犬体験教室の実施について
演者氏名	剣持 悟 ¹⁾ 野口 裕美 ²⁾ 吉田 文 ³⁾
所属	1) 川村義肢株式会社 2) 四條畷学園大学 3) 大阪保健医療大学

我々は「ほじょ犬のひろば」という取り組みを通じて、市民の方々に身体障害者補助犬について理解し、補助犬使用者が住みやすい街づくりについて考える機会を提供してきた。しかしながら、補助犬法の存在をご存じない方が多く、補助犬同伴について、お店の側や他の利用者が間違った知識で対応してしまうことがある。そこで、学生の上に正しい知識を身につけて欲しいと考え、介助犬の体験教室を開催している。

対象は大東市内の公立小学校 12 校の 3 年生で、全ての生徒に受講してもらうため学年を固定して実施している。また、開催校を 3 から 4 校とし、近隣の小学校との合同授業（コロナ期間中はオンライン開催）とした。事前学習資料として、補助犬もっと知って BOOK や補助犬啓発 DVD を各校に配布することで、当日の授業でも積極的に質問が行われ、とても活気に満ちたものになっている。本授業は、身体障害について学び、伴侶動物としての犬について学び、ほめて伸ばすという陽性強化の効果についても実感できる貴重な機会であると考えられる。

また、更なる興味が湧いてきた児童に対しては、ほじょ犬のひろばの案内も流すことで、家族みんなで学べる機会にもなっている。本年度は身体障害者補助犬学会の開催に合わせて、ほじょ犬の体験教室として盲導犬、聴導犬の育成団体にも参加してもらっている。今後は多くの自治体で推進できるような仕組みを考えていきたい。

11

演題名	今だからこそ言える事 ～元介助犬使用者の立場から～
演者氏名	平野 友明 ¹⁾ 池永 康規 ²⁾
所 属	1) ほじょ犬ファミリーすまいるんぐ 2) やわたメディカルセンター

今回、2頭の介助犬と生活を経験した介助犬使用経験者として介助犬との生活による変化、そして引退後の当事者としての気付きについて報告をさせていただきます。2009年に41歳で頸髄損傷C4・5・6四肢麻痺となる。2012年6月から1頭目介助犬との生活開始（活動期間7年8ヶ月）、2020年4月から2頭目介助犬との生活開始、2024年10月引退（活動期間4年6ヶ月。受傷後、介助犬が来るまで困っていた事は血圧が安定せず、急変する事が多かった。そのため介助を急に要する事が多く、介助者である家族が常時行動を共にしている状態であった。介助犬との生活を開始してからは生活全体のモチベーションが向上し、少々の体調の変化は受け入れる事ができるようになった。責任感からも大きく体調を崩す事も徐々に減っていった。そして外出時には介助犬を連れていくと、声をかけられやすく、困っている時に他の人に頼みやすくなった。2頭目の介助犬が引退してからは受傷時から介助犬が来るまでと同じではない。障害を持って15年自分でできる事は増え、講演などの社会参加で、肺活量も戻り、大きな声も頑張れば出せるようになった。普段の生活は介助犬が居なくても困らない事が増えたけど、現在もスマホは落とす。そして、外出頻度は減っている。外気の変化に対応しやすくなったが、外出しない事で血圧の変動が激しく、寝込む事も増え、褥瘡ができてしまった。介助犬が居なくなってからわずか1ヶ月ほどでの体が衰えを感じている。今後の生活スタイルについての介助犬とはについて更に考察したい。

12

演題名	今だからこそ言える事 ～元介助犬使用者家族の立場から～
演者氏名	平野 克美 ¹⁾ 池永 康規 ²⁾
所 属	1) ほじょ犬ファミリーすまいるんぐ 2) やわたメディカルセンター

今回、2頭の介助犬と生活を経験した介助犬使用者の介助者である家族（妻）として介助犬との生活による変化、そして引退後の気付きについて報告をさせていただきます。受傷後介助犬が来るまで困っていた事は急変する事が多く、急な介助要し、介助者の外出は、車で10分程度で戻れる範囲内に限り、常時携帯を気にして生活をしてきた。介助者の入浴、排泄時にも数分ごとに大きな声で夫に呼びかけ、異常の有無を確認し、常時緊張状態で生活していた。介助犬が来てからはいつでも自宅内では呼びに来てくれ、家事も安心して過ごせる時間が格段に増えた。頼み事をされても、介助犬を通す事で癒された。徐々に頼まれ事も減り、外出先でずっと付き添う事なく、別行動ができるようになった。また、イベント・講演などの手伝いで、離れた家族も集まる機会が増えた。ボランティア団体を作り、人と人を繋いでくれる役割を介助犬が果たしてくれた。今回、介助犬が引退をして急変時の恐怖で夫の在宅時に外出は避けるようにしている。一方で外出時の準備は楽になった。2時間必要だった介助犬のブラッシングや必要物品の準備がなく、1時間程度になった。掃除機をかける回数も激減し、1日3回以上が3日に1回となった。また、介助犬が居る時は、常に同伴拒否されないか気にかけて、拒否された時の対応を頭の中かでシュミレーションしたり、リーフレットをすぐに渡したり、緊張してお店を選んでいたので、どうしても同じ所に行きがちだった。現在は物理的に車イスでも入れる所には、気軽に入れるようになった。しかし、引退後に当事者は急速に体力が衰え、精神的なデメリットを抱えている状況は否めない。今後の生活スタイルについての介助犬とはについて介助犬使用者の家族として更に考察したい。

次世代の補助犬について考える
～人と犬との相互作用の構築に向けて～

日本身体障害者補助犬学会

The 16th Annual Meeting of the Japanese Society of Service Dog Research

第16回学術大会 2025年1月11日(土)・12日(日)

11日(土)

市民公開講座

手話通訳、UDトークあり

人と犬が幸せに暮らすために

会場：四條畷学園短期大学清風学舎

要予約

11日(土)

ほじょ犬のひろば

入場
無料

介助犬、聴導犬、盲導犬デモンストレーション

会場：TTT morineki

12日(日)

学術大会

手話通訳、UDトークあり

学術発表、ペット防災に関する講演など

会場：四條畷学園短期大学清風学舎



詳細はHPへ



大会長 野口裕美 (四條畷学園大学リハビリテーション学部教授)

演題募集期間 2024年10月15日(火)～11月29日(金)

大会運営担当

株式会社アステム convention-help@astem-co.co.jp

〒530-0044 大阪府大阪市北区東天満 2-7-12 スターポート

(一社)日本身体障害者補助犬学会第16回学術大会 市民公開講座

人と犬が幸せに暮らすために

手話通訳
UDトーク有



コーディネーター:山崎 恵子 (一般社団法人アニマル・リテラシー総研 代表理事)

犬の食について考える～薬膳ごはんのススメ～

油木 真砂子 (愛玩動物看護師、中国中医薬研究促進会認定 国際中医薬膳師、テリントンTタッチ認定プラクティショナー、優良家庭犬普及協会グッドシチズンテスト サブジャッジ)

犬のしつけと行動学～ストレスレスな関係づくり～

入交 眞巳 (東京農工大学ディープテック産業開発機構伴侶動物診療拠点特任准教授)

犬のしつけと遊び～おもちゃの役割から選び方まで～

金子 真弓 (優良家庭犬普及協会常任理事&公認ジャッジ、CPDT 認定トレーナー、コング専属トレーナー、テリントンTタッチ認定プラクティショナー)

日時 2025年1月11日(土)13時～16時30分

会場 四條畷学園短期大学清風学舎 80周年記念ホール

参加費 1000円(事前申込制・定員に達し次第締切)

主催 一般社団法人 日本身体障害者補助犬学会



申込はコチラ

ほじょ犬のひろば

協 賛：四條畷学園大学、株式会社コーミン、株式会社イング、新大阪食品株式会社、DAITO TIME 有志、

住友生命大阪団体支社船場支部、天成道、なんこうシャル、かとびん、黒部 馨様、

看護師国家試験予備校みかた塾、TOTO KITCHEN、船津 裕之様、

日本リハビリテーション工学協会有志

日本身体障害者補助犬協会 第16回学術大会 連携事業

だれもが笑顔になる

ほじょ犬のひろば

@もりねき

会場：もりねき広場 および
周辺 (JR 四条畷駅徒歩 5分)
※雨天時は四條畷学園で縮小開催、
ペット同伴不可となります

morineki

わん! わんわん! の日 日時: 2025年 1月11日(土) 10~16時

- ワンちゃん大好きコーナー
- ほじょ犬デモンストレーション
+歌のステージ UDトークあり
- アクティビティ & モビリティコーナー
- コミュニケーションコーナー
- Keitto 企画

犬丸翔太郎 十川ももこ 中納音楽教室

参加無料

主催 介助犬のひろば実行委員会

ACCESS MAP

ご来場は公共交通機関のご利用をおすすめします

- A ほじょ犬のひろば
もりねき広場
大阪府大東市北条3丁目1-1
- B 市民公開講座
四條畷学園短期大学清風学会
大東市学園町 6-45
- C なんこうシャル

なんこうシャル

もりねき広場会場マップ

ワンちゃん大好きコーナー

- ほじょ犬育成団体チャリティーグッズ
- ワンちゃんグッズ



モビリティエリア

ウッドデッキ

アクティビティエリア

ステージ



トイレ

アウトドアベース・ソトアソ

ケイトルオカラ(レストラン)

17時からは学会懇親会場



ケイトレイバ(ベーカリー)

ケイト オoppi(ワークショップ)



抽選会場・総合案内

権現川

←JR四条駅

Keittoブース

- Ruokala(広場に販売): スープ+フリーズドライスープ
- Leipa: ワンちゃんモチーフパン販売
- Oppi: ワンちゃんアイテムづくりワークショップ



もりねき書店(Book&Cafe)

コミュニケーションコーナー

- 点字名刺・カード作り
- 手話カフェ(12~13時)
- 補助犬使用者交流会(14~15時)
- 支援事業紹介(※別会場なんこうチャル)

申し込みはこちら



日本身体障害者補助犬学会
第16回学術大会 市民公開講座

人と犬が幸せに暮らすために

犬の食について考える ~薬膳ごはんのススメ~

油木真砂子(愛玩動物看護師、中国中薬研究促進会認定 国際中薬膳師)

犬のしつけと行動学 ~ストレスレスな関係づくり~

入交真巳(東京農工大学 伴侶動物診療拠点 特任准教授)

犬のしつけと遊び ~おもちゃの役割から選び方まで~

金子真弓(優良家庭犬普及協会 常任理事&公認ジャッジ)

会場 四條畷学園短期大学 清風学舎 6F

80周年記念ホール

参加費 1,000円

[要予約]

お知らせ

一般社団法人日本身体障害者補助犬学会 学会誌 日本補助犬科学研究投稿規定ならびに執筆要綱

投稿規定ならびに執筆要綱は学会ホームページの学会誌【日本補助犬科学研究】のページを参照くださいますようお願いいたします。

<https://jssdr.net/journal-kitei.html>

学会事務局

勤務先・お役職・登録住所等が変更になった場合は、事務局まで必ずご連絡ください。

連絡先：一般社団法人日本身体障害者補助犬学会 事務局
〒162-0833 東京都新宿区筆筈町43 新神楽坂ビル2階
有限会社ビジョンブリッジ内
電話番号：03-5946-8848（専用電話）
（平日9:30～18:00 土・日・祝日休み）
FAX番号：03-5229-6889
Eメール：office@jssdr.net
学会ホームページ：<https://jssdr.net/>

日本身体障害者補助犬学会 第17回学術集会のお知らせ

日時：2025年秋（日程未定）

会場：オンライン上で開催

大会長：三浦 靖史

（神戸大学大学院保健学研究科 リハビリテーション科学領域 准教授）

賛助企業会員

日本全薬工業株式会社

学校法人 ヤマザキ学園

（敬称略・順不同）



アニマル・リテラシー

Animal Literacy

一般社団法人アニマル・リテラシー総研
<https://www.alri.jp>



公益社団法人

大分県獣医師会

誰かの力になる喜びを。



医療・福祉・スポーツをリハビリテーションで支える
大阪保健医療大学

保健医療学部リハビリテーション学科
理学療法学専攻・作業療法学専攻
言語聴覚専攻科・大学院 保健医療学研究科

〒530-0043 大阪市北区天満 1-9-27 ☎0120-581-834
公益財団法人日本バラスポーツ協会 | 中級バラスポーツ指導員資格取得認定校



作業療法学専攻では、動物介在療法や身体障がい者補助犬についての授業を取り入れています



k 川村義肢株式会社

大東本社 〒574-0064 大阪府大東市御領1-12-1 TEL.072-875-8020 FAX.072-875-8041
東京本社 〒136-0073 東京都江東区北砂1-19-9TEL.03-5635-1611 FAX.03-5635-1612

<https://www.kawamura-gishi.co.jp>



人を支える 医療人へ。



四條畷学園大学



おふくろの家は動物と暮らせる特養を目指します



社会福祉法人 淳涌界（じゅんゆうかい）
特別養護老人ホームおふくろの家
愛知県弥富市又八2丁目 128-1
0567-67-7201



ドクトレーナーによる
ドックセラピーで
心身のリハビリテーション実施中



おふくろの家



株式会社 スイッチオンサービス

通所介護事業所14カ所、居宅介護支援事業所8カ所
 訪問看護事業所6カ所、訪問介護事業所4カ所、高齢者向け住宅2カ所
 海外事業部 ENCENDER (フットボールマネジメント)
 兵庫エリア/明石・神戸・伊丹・宝塚・三田
 滋賀エリア/湖南・東近江・竜王・野洲・近江八幡
 大阪エリア/淀川区

代表取締役 (理学療法士) 石川 智昭

兵庫県伊丹市鴻池3丁目16番10号 ☎072-777-3205

<http://switchon-service.co.jp>

衛生環境を整える

DUSKIN!

DOG HOTEL Cuddle(カドル)

2024.12.13

GRAND OPEN



Cuddle

東京都練馬区旭町1丁目34-9
旭町E&S
受付時間 9:00 ~ 19:00 年中無休
TEL:03-6909-8830
代表者 畑和久



ひろびろ快適個室でお預かり
開放的なフリースペースもあります

Instagram



HP



Nine & Four.



Gazing at the future



ZENOAQ

動物の価値を高めること。
それが、私たちの使命です。



日本全薬工業株式会社

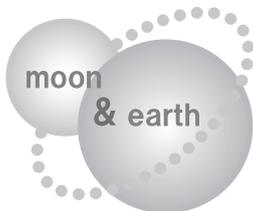
福島県郡山市安積町笹川字平ノ上1-1

www.zenoaq.com





特定非営利活動法人
日本補助犬情報センター
JAPANESE SERVICE DOG RESOURCE CENTER



株式会社ムース
代表取締役 宮田和彦

身体障害者補助犬を 推進する議員の会

編集後記

8月に開催されたパリパラリンピックの開会式で、ギリシャの旗手を務める選手と一緒に進行する盲導犬の姿が見られました。歴史あるフランスの首都パリですが、飲水器の高さを健常者と車椅子ユーザーに加えて補助犬への給水に適した高さでも設置するなど補助犬ユーザーへの配慮が進んでいるとのことでした。

誰にとっても住みよいまちづくりが、パリだけでなく世界中でこれからも続くことを願います。

さて、本日、第18巻を無事に発行することができましたのは、執筆者、査読者、大会プログラム委員、編集委員、そして出版社の皆様の多大なご支援のおかげであり、心から御礼申し上げます。

今巻には、昨年10月に開催されました第15回学術大会の大会長講演、基調講演、シンポジウム2編に加えて、原著論文2編、現場報告1編の計7編を掲載しましたが、原著論文のうち1編は英語論文です。世界で唯一無二の身体障害者補助犬に関する学術誌である本誌は、国内のみならず世界に向けて補助犬に関する研究成果を発信する舞台であると自負しています。会員の皆様におかれましては、研究成果を学会発表に留めずに、論文として執筆して本誌にご投稿いただけますように切にお願い申し上げます。

編集委員長

三浦 靖史 (神戸大学)

編集委員 (五十音順)

菊地 尚久 (社会福祉法人 千葉県身体障害者福祉事業団
千葉県千葉リハビリテーションセンター)
佐野 智浩 (公益財団法人 日本盲導犬協会)
高柳 友子 (社会福祉法人 日本介助犬協会)
野口 裕美 (四条畷学園大学)
山崎 恵子 (公益社団法人 日本聴導犬推進協会)
山本 真理子 (帝京科学大学)
吉田 文 (大阪保健医療大学)

日本補助犬科学研究 第18巻 第1号

2024年12月25日発行

編集 一般社団法人日本身体障害者補助犬学会編集委員会

委員長 三浦 靖史

発行 一般社団法人日本身体障害者補助犬学会

代表理事 菊池 尚久

〒162-0833

東京都新宿区筆筈町43 新神楽坂ビル2階 有限会社ビジョンブリッジ内

一般社団法人日本身体障害者補助犬学会事務局

TEL: 03-5946-8848 E-mail: office@jssdr.net

学会ホームページ: <https://jssdr.net>



ORTOP® - Pets

ひとの技術を
生かして
動物もイキイキ!!



詳しくはこちらから

ペットの福祉用具

ある日突然、事故・病気に見舞われてしまった家族（ペット）。
今一度、一緒に歩いたり、走ったりしたい…。
そんな願いを叶えるペットのための福祉用具があります。

川村義肢は長年に渡り、ひとの義肢や装具を製造してまいりました。
この技術を生かして、ペットのための福祉用具の提供をスタートしました。

川村義肢株式会社

大東本社 〒574-0064 大阪府大東市御領1-12-1 TEL.072-875-8020 FAX.072-875-8041

東京本社 〒136-0073 東京都江東区北砂1-19-9 TEL.03-5635-1611 FAX.03-5635-1612

<https://www.kawamura-gishi.co.jp>



社 会 の た め に

あ な た の た め に

moon & earth



有限会社ムース

代表取締役 宮田和彦

笑顔につながる 明日を、共に。



米国に本社を置く、グローバルな研究開発型のバイオ医薬品企業アッヴィ。
私たちが目指すのは、この社会の誰もがその人らしく笑顔ある日々を過ごせること。
そのために、多様な社員が想いをひとつに、
新しい医薬品や治療法を生み出すことに挑み続けます。
そして、医療分野にとどまることなく、同じ想いを持つ人々と共に、
社会課題の解決に向けて取り組んでいきます。

abbvie

アッヴィ合同会社

〒108-0023 東京都港区芝浦三丁目1番21号
msb Tamachi 田町ステーションタワーS
<https://www.abbvie.co.jp/>